

北白川小学校の遺跡

— 現地説明会資料 —

1994年12月23日

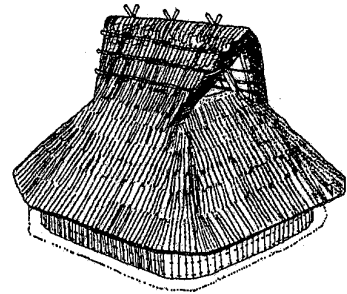
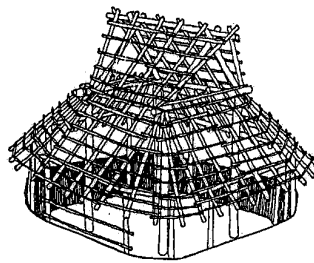
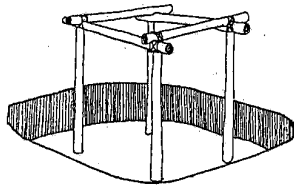
(財)京都市埋蔵文化財研究所

今回の埋蔵文化財の発掘調査は、北白川小学校の体育館改築工事にもなって、9月22日から約3ヶ月間の予定で開始した。校内での発掘調査は、今回で3回目になり、調査面積は680㎡である。以前の2回分を合計すると930㎡の面積をこれまでに調査したことになり、縄文時代の川跡や飛鳥時代の集落(村)跡が発見されている。

縄文時代の遺跡は、学校の周辺でも、深鉢・浅鉢などの縄文土器や石鏃・石斧などの石器が発見されていることから、地名をとって「小倉町別当町遺跡」と呼ばれている。約2000～5000年前の縄文時代前期から後期の遺跡である。

このほか、北白川周辺にひろがる縄文時代の遺跡は「上終町遺跡(前期～後期)」、「追分町遺跡(前期～晩期)」、「京都大学本部構内遺跡(後期～晩期)」、「京都大学教養部構内遺跡(後期)」などが知られている。

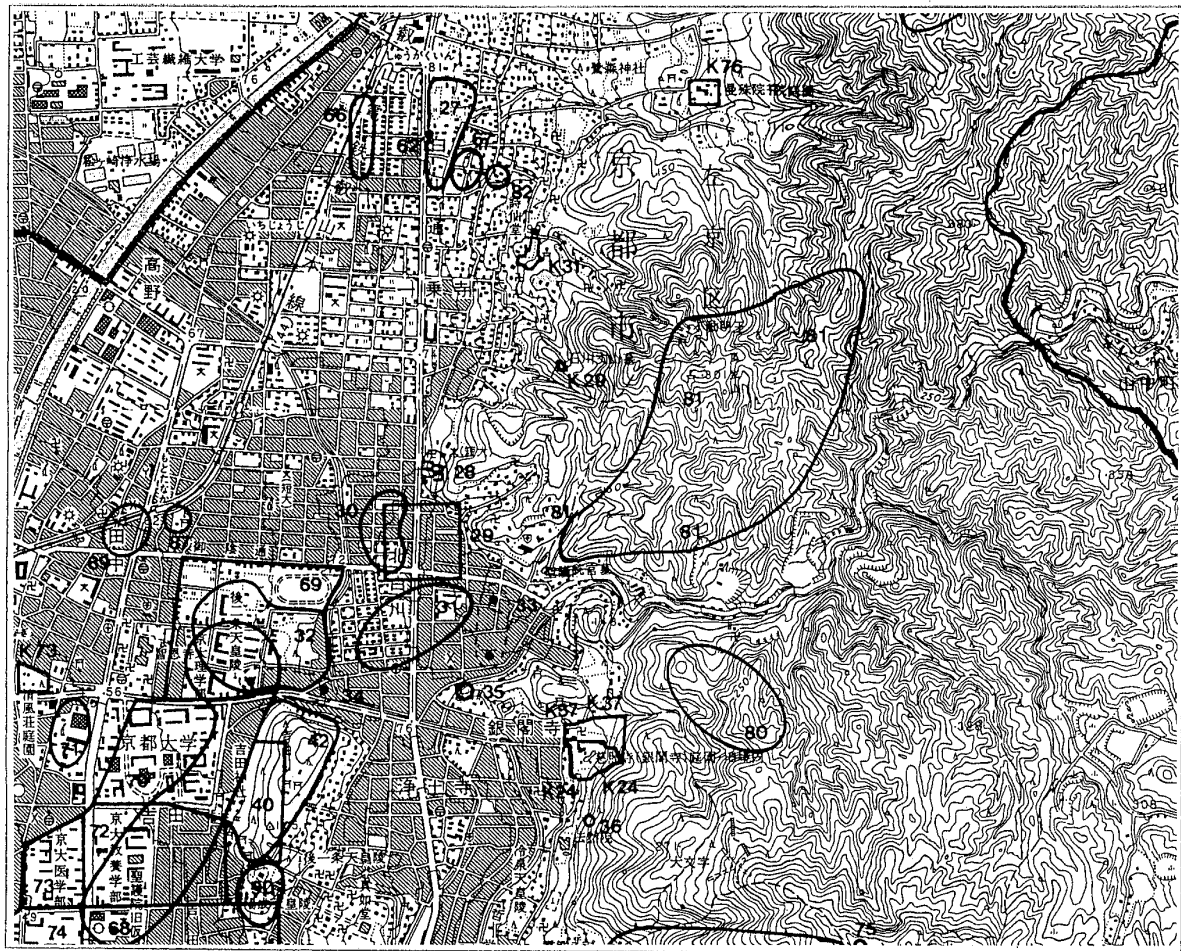
飛鳥時代の集落跡は、いまから12年前に、北白川小学校の中で行なわれた発掘調査で初めて発見された、約1300～1400年前の遺跡である。



てあなじゆうきょ
竪穴住居の作り方(「古代日本を発掘する6 古代の村」岩波書店より)

1回目の発掘調査は、1982年に南北校舎北端の新築工事の時にに行なわれた。この時には、西に向かって流れる縄文時代の川跡(幅約4m、深さ約1.5m)のほかに、古墳時代から飛鳥時代の家の跡である竪穴住居が7棟、掘立柱建物の跡が3棟が発見された。このことで、北白川小学校には集落跡が残っていることが初めてわかり、小学校の北側で見つけられていた「北白川廃寺」と呼ばれる飛鳥時代後半(7世紀後半)の寺跡と関係する集落跡だろうと考えられた。遺物は、土師器、須恵器などが出土した。

- ※ 土師器：焼いて作るとき火の温度が低いので、軟らかくて壊れやすい赤茶けた色の土器。
- 須恵器：本格的な窯を作って高い火の温度で焼くので、硬くて焼きしまっている灰色の土器。



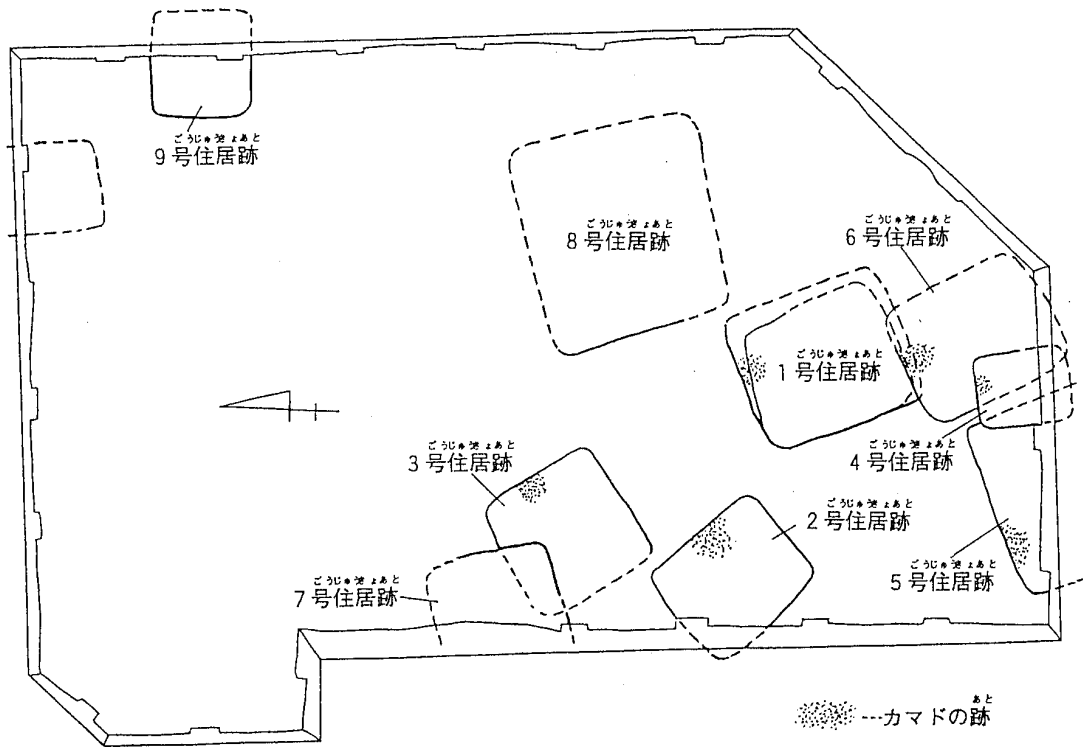
- | | |
|--|--------------------------|
| 27 一乗寺向畑町遺跡：土壘・ピット。縄文早期～平安時代 | K24 慈照寺（銀閣寺）庭園：特別史跡・特別名勝 |
| 28 北白川瓦窯址：1～4号窯址。奈良時代 | K29 石川丈山墓：史跡 |
| 29 北白川廃寺：瓦積基壇堂・塔・回廊。飛鳥～鎌倉時代 | K31 詩仙堂：史跡 |
| 30 北白川上終町遺跡：竪穴住居。縄文前期～後期 | K37 慈照寺（銀閣寺）旧境内：史跡 |
| 31 北白川小倉町別当町遺跡：竪穴住居・掘立柱建物。縄文前期～後期・飛鳥時代 | K73 清風荘庭園：名勝 |
| 32 北白川追分町遺跡：竪穴住居・配石墓・河川・埋没林。旧石器・縄文中期～晚期 | K76 曼殊院書院庭園：名勝 |
| 33 池田町1・2号墳：円墳・横穴式石室。古墳後期 | |
| 34 追分町1・2号墳：円墳・横穴式石室。古墳後期 | |
| 35 浄土寺小山町遺跡：墓地？。鎌倉時代 | |
| 36 浄土寺南田町経塚：石櫃・経巻正応二年。鎌倉後期 | |
| 40 吉田神社旧境内：神社、貞観年間（859～877）成立。平安前期～現代 | |
| 42 吉田山遺跡：磨製石斧。弥生時代 | |
| 62 向畑古墳：円墳・横穴式石室。古墳後期 | |
| 66 一乗寺松田町遺跡：河川。平安中期 | |
| 67 一乗寺西浦畑町遺跡：散布地。平安前期 | |
| 68 京都大学構内縄文・弥生遺跡：方形周溝墓・溝・水路。縄文～弥生時代 | |
| 69 京都大学北部構内遺跡：弥生時代溝・方形周溝墓、平安時代瓦溜、中近世火葬塚・水田。縄文～近世 | |
| 70 京都大学本部構内遺跡：縄文～弥生時代土壘、奈良時代竪穴住居、中世土壘墓・土壘、近世白川道・井戸。縄文晚期～近世 | |
| 71 京都大学西部構内遺跡：邸宅・吉田泉殿。中世 | |
| 72 京都大学教養部構内遺跡：弥生前期水路・溝、古墳時代方墳・土壘墓、奈良時代掘立柱建物、平安時代梵鐘鑄造遺構、中世土壘墓・溝・門・建物、近世井戸・柵・道路。縄文～近世 | |
| 73 京都大学医学部構内遺跡：弥生時代溝、平安時代井戸・土壘、中世溝・井戸・土壘、近世井戸。旧石器・弥生～近世 | |
| 74 京都大学病院構内遺跡：井戸・溝・土壘・柵。平安～近世 | |
| 80 中尾城址：山城（山稜）、天文十八年（1549）足利義晴築城、同十九年落城、土塁・平坦地・井戸状凹地 | |
| 81 北白川城址：山城（山頂～山稜）、大水七年（1527）細川高国築城、平坦地 | |
| 82 渡辺館跡：城館、土豪渡辺氏の館跡 | |
| 87 田中構跡：城館、文明六年（1474）頃田中郷々民の自営堀構 | |
| 89 田中渡辺城址：平城、堀、田中渡辺氏の居城 | |
| 90 神楽岡城址：山城（丘陵端）、堀切・曲輪 | |

北白川小学校周辺の遺跡 1:25,000 (「京都府遺跡地図1989」より)

2回目の発掘調査は、南へ約50m離れている場所で、1984年に南北校舎南端の新築工事の時に行なわれ、この時にも、竪穴住居跡2棟と掘立柱建物の跡が発見され、集落跡が南の方まで広がっていることがわかった。ところが、この竪穴住居の遺構は、1回目の調査の時に見つけたものよりも少し新しく、飛鳥時代から奈良時代にかけての住居跡であることもわかり、集落(村)の移り変わりの様子を知ることができるようになった。

出土した遺物も1回目の調査と同じように土師器、須恵器などであるが、壊れないで完全な形で残っていた軒丸瓦1点が出土した。これと同様の瓦が北隣の「北白川廃寺」にも使われていたことがわかり、集落(村)と寺とは密接な関係があると考えられた。

今回の3回目の発掘調査でも、竪穴住居跡9棟と掘立柱建物跡が見つかり、飛鳥時代の集落の規模は南北約100m以上にもなる大きなものであり、西側では落差0.6m程の浅い谷口の地形になっていて、そこにも集落が営まれていたことがわかった。

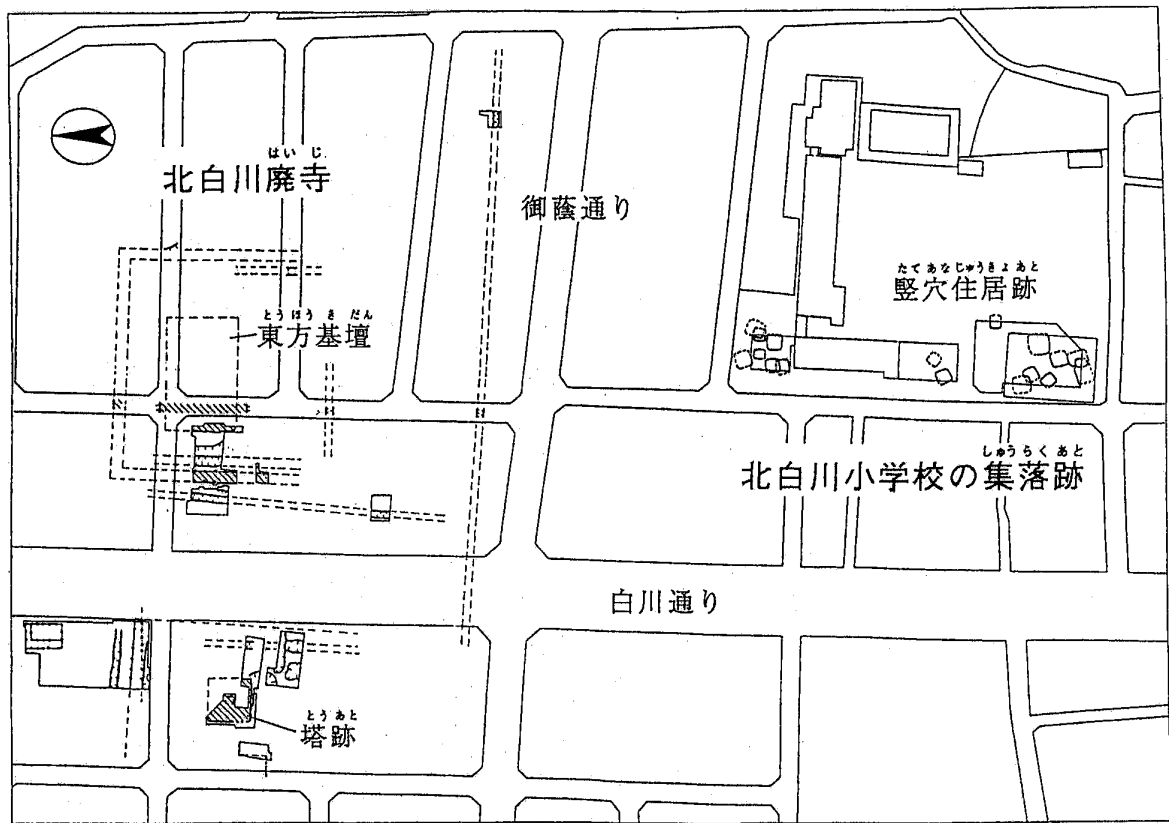


第3回目の発掘調査で見つかった竪穴住居跡の位置図

そして、1回目の調査で見つかった竪穴住居と同じ家の方向をもつ竪穴住居跡(Aタイプ)が調査区域の南側に残っていて、2回目の調査で見つかった竪穴住居と同じタイプ(Bタイプ)の竪穴住居跡が調査区域の中央寄りで見つかることから、新しい時期の集落の大きさは狭くなって、その構成に変化があったことなど、集落(村)の中の様子が具体的にわかるようになってきた。

※竪穴住居Aタイプ：家の方向が方位(東西南北)のほぼ正方向を向き、カマドが北辺に作られる。

※竪穴住居Bタイプ：家の方向が方位(東西南北)に対して約45度傾き、カマドが北東辺に作られる。



「北白川廃寺」と北白川小学校の集落跡の位置図

出土した遺物は、土師器では碗・杯・高杯・鉢・甕・竈・土錘など、須恵器では杯蓋・高杯・円面硯・鉢・播鉢・壺・甕などのほか、製塩土器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、軒平瓦・軒丸瓦、銭貨、滑石製紡織具の紡錘車、骨製装飾具の釦、鉄製道具の刀子や鍬鉋、鉄製農耕具の鋤先、精錬遺物の鉄滓などがある。

これらのうち、飛鳥時代の土器は、その時代の形態や製作技法の特徴を色濃く残す完形品や大形破片が多く、これまで京都市内ではあまり出土しなかったものであり、質量ともに資料的な価値が高い。なかでも、特に、重要な発見が次の3点である。

「無文銀銭」：日本最古の貨幣といわれているが、一般に流通していたとは考えられていない。崇福寺跡（滋賀県大津市）の塔の心礎に舍利容器とともに納められていた例などから、地鎮具として祭祀的に使われていたのかもしれない、と考えられている。

今回の無文銀銭は、調査区の南壁際に位置する飛鳥時代後半（7世紀後半）の遺構から出土した。大きさは直径3.0～3.1cm、厚さ0.1～0.2cm、重さ9.5g、銀の含有率は89.7パーセントである。京都では初めての出土例であり、全国では14例目になる。

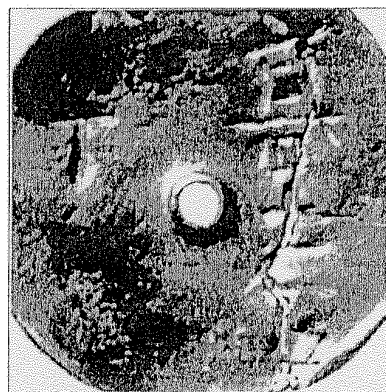
表面には「高志」という二文字と「T」字形がタガネで刻み込んである。これまでの出土例では

遺跡名	所在地	枚数
京都府	京都市左京区北白川別当町	
① 小倉町別当町遺跡	(京都市立北白川小学校)	1
滋賀県		
② 崇福寺跡	大津市滋賀里町長尾	12
③ 唐橋遺跡	大津市瀬田2丁目	1
④ 狐塚遺跡	栗東町安養寺	1
⑤ 赤野井灣遺跡	守山市赤野井町	1
三重県		
⑥ 北野古墳	鈴鹿市加佐登町	1
奈良県		
⑦ 川原寺跡	明日香村川原	1
⑧ 飛鳥京	明日香村岡	1
⑨ 石神遺跡	明日香村飛鳥	1
⑩ 藤原京左京六条三坊	橿原市四条町	1
⑪ 谷遺跡	桜井市谷	1
⑫ 都祁村	山辺郡都祁村	1
大阪府		
⑬ 船橋遺跡	柏原市船橋	1
⑭ 真宝院跡	大阪市天王寺区	100
計 14 遺跡		計 124 枚

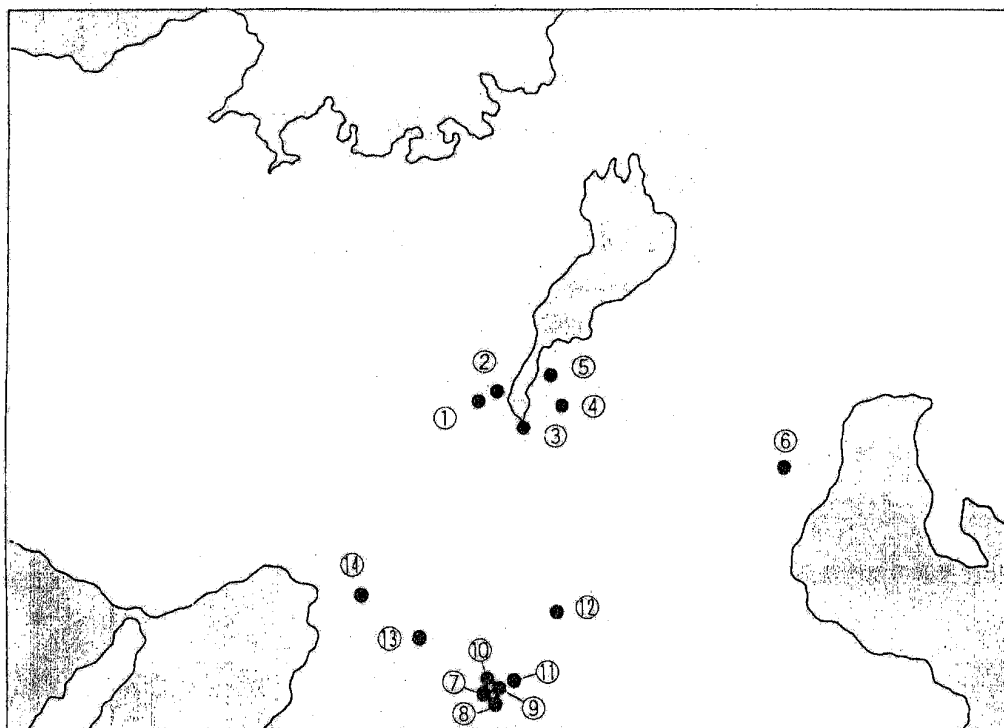
「無文銀銭」出土地点の地名表



「無文銀銭」(実物大)



「無文銀銭」(一部2倍拡大)



「無文銀銭」出土地点の位置図

「〇」、「十」、「田」などを記したものは知られていたが、「高志」のように明瞭に判読できる文字を刻んだものは、全国でも初めての発見である。この二文字の解釈については、他に類例もないことから、いまのところ「地名」、「人名」、「吉祥句」など、それぞれの面から検討を加えており、また、文字自体の解釈よりも、“何のために”、“何を意図して”刻み込まれたのか、その意味を追求することも重要であろうと考えられ、現在これらの疑問点について説明を急いでいる。

※「崇福寺跡」は、山中越えをこえて、北白川小学校から東へ約5kmのところにある。大津京遷都の翌年、668年(天智七)に建立されたと伝えられる。発掘調査の結果、たいへん大きな伽藍であったといわれており、塔跡心礎の埋納孔から出土した無文銀銭は、舍利容器や荘嚴具と共に“国宝”として京都国立博物館に常設展示されている。

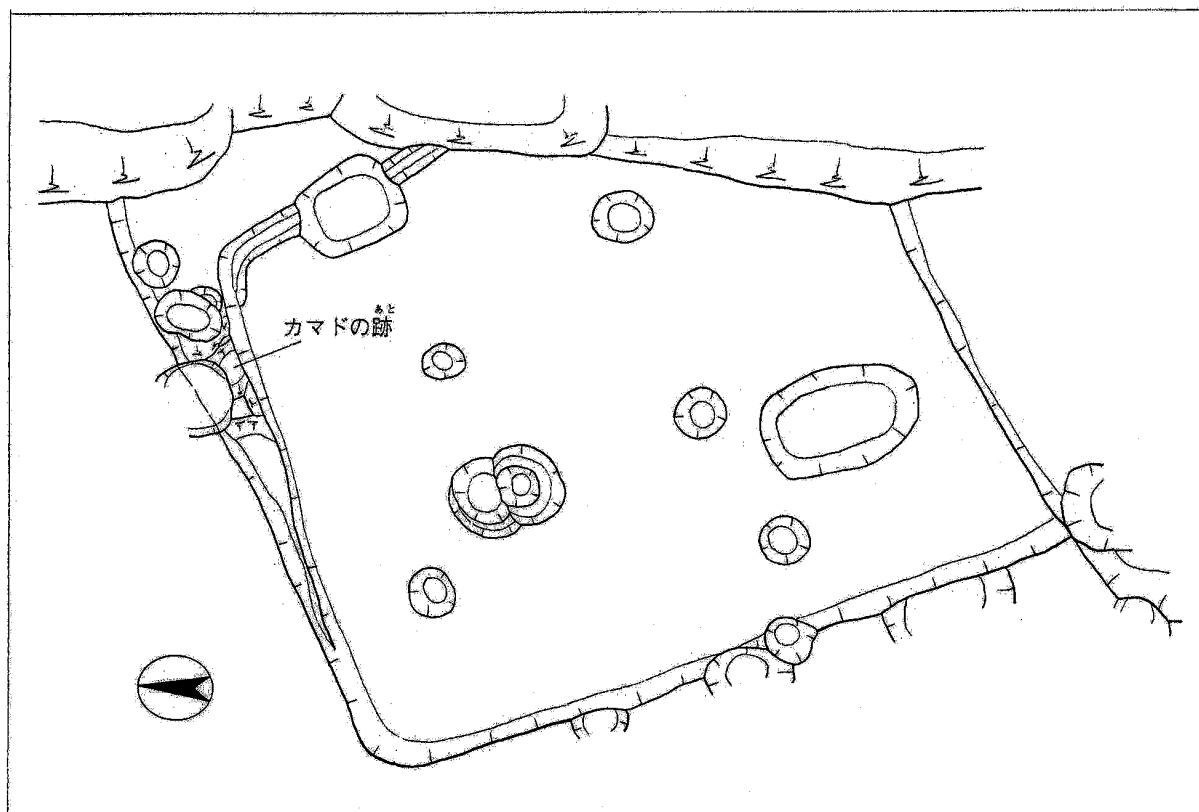
都道府県	出土遺跡数
京都府	1
宮城県	2
福島県	4
茨城県	2
栃木県	2
群馬県	42
埼玉県	24
千葉県	17
東京都	2
神奈川県	4
新潟県	1
富山県	8
石川県	7
長野県	2
岐阜県	3
静岡県	4
愛知県	14
三重県	2
滋賀県	1
大阪府	4
兵庫県	1
奈良県	4
岡山県	1
広島県	1
徳島県	1
福岡県	2
熊本県	1
計 27 都府県	計 157 遺跡

「瓦塔」：供養塔の意味を込めて作られた須恵器の仏具である。瓦塔の高さは、他の類例を見ると1m以上の大きなものまである。古いものでは、飛鳥時代の衣川廢寺跡（滋賀県大津市）の出土例があるが、多くは奈良時代から平安時代に作られ、関東地方に集中している。今回出土した瓦塔は、平安時代の整地層の中に含まれていた。屋根の軒隅のところしか出土していないので、何重の塔になるのか不明であるが、出土片に残る角度から六角形の多角塔であることがわかっている。この瓦塔も京都では初めての出土であり、全国では157例目になる。

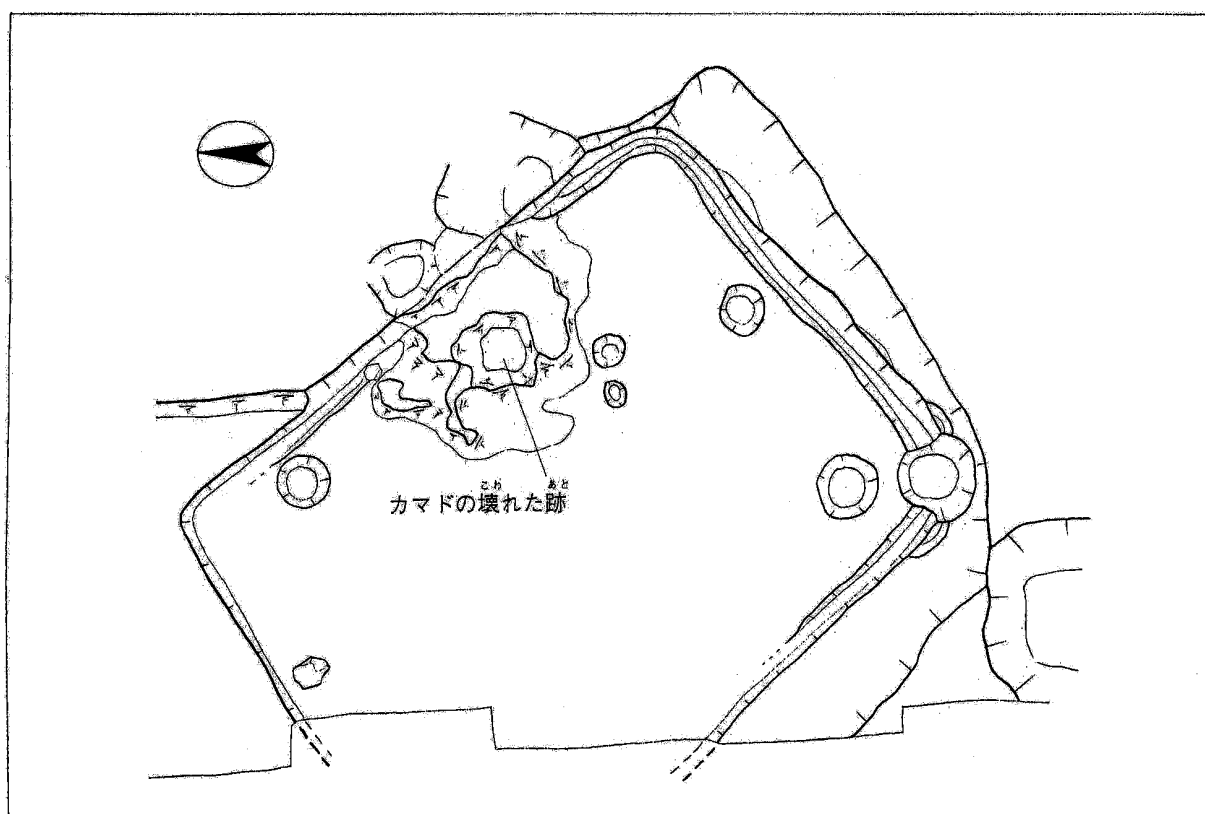
「唐三彩皿」：中国の唐（7世紀初めから10世紀初めまで、古代の中国では最も文明の発展をとげた国）の時代につくられた土器である。白と緑と黄の三色を鮮やかな文様として塗りわけているのが大きな特徴であり、杯・壺・盤・香炉などの器形のほか、様々の副葬品が作られている。今回出土の唐三彩は、輪花状の縁をもつ皿で、型押し文様のものもあるが、小片であるので彩しか認められない。この器形の唐三彩は、京都では2例目の出土であり、全国では3例を数えるだけである。

「瓦塔」出土遺跡の都府県別表

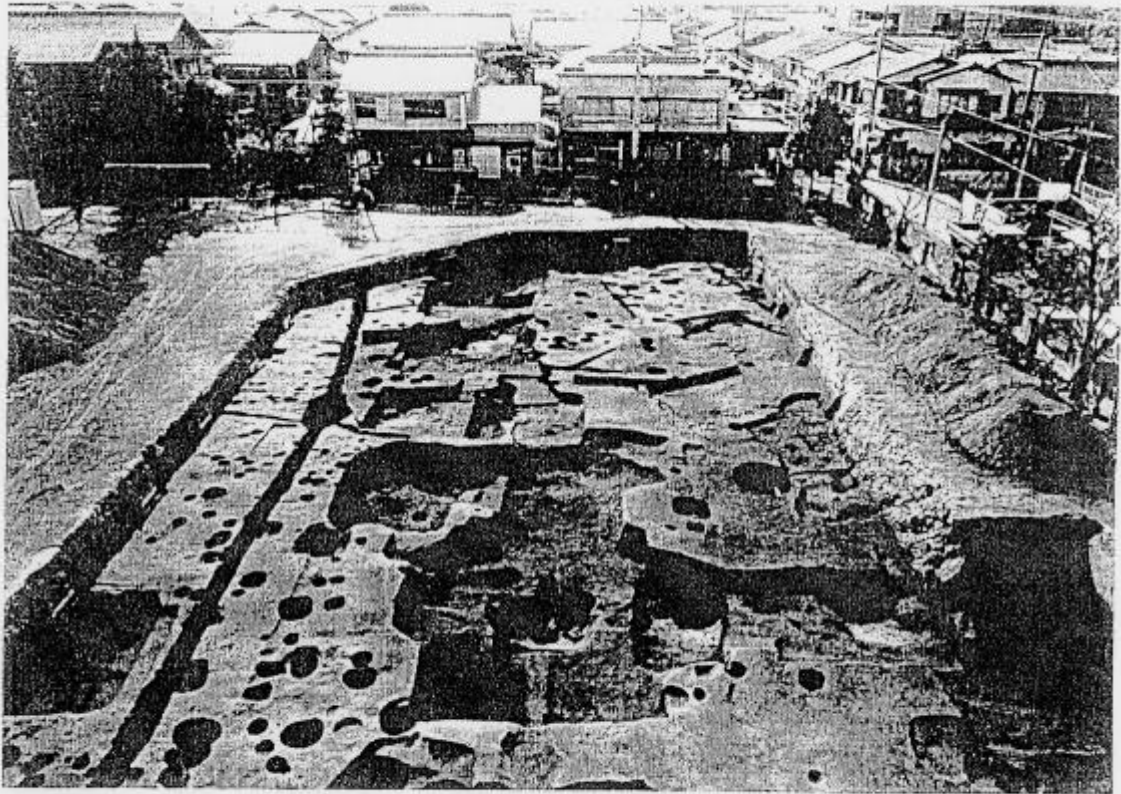
以上、今回の埋蔵文化財の発掘調査では、縄文時代の遺構・遺物の発見はなかったが、予想外の重要な遺物の発見があり、飛鳥時代の遺構・遺物についても数々の成果をあげることができた。



1号住居跡の遺構実測図



2号住居跡の遺構実測図



竪穴住居の検出遺構面の全景



2号住居跡の検出状況

— 北白川小学校の遺跡 —

北白川小学校の地下には、縄文時代の川跡や飛鳥時代の集落（村）跡が残されていた。縄文時代の遺跡は、学校の周辺でも、深鉢・浅鉢などの縄文土器や石鍬・石斧などの石器が発見されていることから、地名をとって「小倉町別当町遺跡」と呼ばれている。約2000～5000年前の遺跡である。

飛鳥時代の集落跡は、今から12年前に北白川学校の中で行なわれた発掘調査で初めて発見された。約1300～1400年前の遺跡である。

発掘調査は、今回で3回目になり、調査面積は680㎡である。以前の2回分を合計すると930㎡の面積をこれまでに調査したことになる。

1回目の発掘調査は、1982年に南北校舎北端の新築工事の時に行なわれた。この時には、西に向かって流れる縄文時代の川跡（幅約4m、深さ約1.5m）のほかに、古墳時代から飛鳥時代の家の跡である竪穴住居が7棟、掘立柱建物の跡が3棟が発見された。このことで、北白川小学校には集落跡が残っていることが初めてわかり、小学校北側のすぐ近くで見つけられていた「北白川廃寺」と呼ばれる同じ飛鳥時代の寺跡と関係する集落跡だろうと考えられた。遺物は、土師器、須恵器などが出土した。

※土師器：焼いて作るときの火の温度が低いので、軟らかくて壊れやすい赤茶けた色の土器。

須恵器：本格的な窯を作って高い火の温度で焼くので、硬くて焼きしまっている灰色の土器。

2回目の発掘調査は、南へ約50m離れている場所で、1984年に南北校舎南端の新築工事の時に行なわれ、この時にも、竪穴住居跡2棟と掘立柱建物の跡が発見され、集落跡が南の方まで広がっていることがわかった。ところが、この竪穴住居の遺構は、1回目の調査の時に見つけたものよりも少し新しく、飛鳥時代から奈良時代にかけての住居跡であることもわかり、集落（村）の移り変わりの様子を知ることができるようになった。

出土した遺物も1回目の調査と同じように土師器、須恵器などであるが、壊れないで完全な形で残っていた軒丸瓦1点が発見された。これと同様の瓦が北隣の「北白川廃寺」にも使われていたことがわかり、集落（村）と寺とは密接な関係があると考えられた。

今回の第3回目の発掘調査でも、竪穴住居跡9棟、掘立柱建物跡が見つかり、飛鳥時代の集落の規模は南北約100m以上にもなる大きなものであり、西側では落差0.6m程の浅い谷口の地形になっていて、そこにも集落が営まれていたことがわかった。

そして、1回目の調査で見つかった竪穴住居と同じ家の方向をもつ竪穴住居跡（Aタイプ）

調査区域の南側に残っていて、2回目の調査で見つかった竪穴住居と同じタイプ（Bタイプ）の竪穴住居跡が調査区域の中央寄りで見ついていることから、新しい時期の集落の大きさは狭くなっていることなど、集落（村）の中の様子が具体的にわかるようになった。

※竪穴住居Aタイプ：家の方向が方位（東西南北）のほぼ正方向を向き、カマドが北辺に作られている。

竪穴住居Bタイプ：家の方向が方位（東西南北）に対して約45度傾き、カマドが北東辺に作られている。

出土した遺物は、土師器では、椀・杯・高杯・鉢・甕・甕・土錘など、須恵器では杯蓋・高杯・円面硯・鉢・播鉢・壺・甕などのほか、製塩土器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、軒平瓦・軒丸瓦、銭貨、鉄製道具の刀子や鍬鉋、鉄製農耕具の鋤先、滑石製紡織具の紡錘車、骨製装飾具：釦、精錬遺物：鉄滓、スサ入り粘土などがある。

これらのうち、飛鳥時代の遺物は完形品や大形片が多く、これまで京都市内ではあまり出土しなかったものであり、資料的な価値が高い。

なかでも、特に、重要な発見が3点あげられる。

無文銀銭：日本最古の貨幣といわれているが、一般に流通していたとは考えられていない。

崇福寺跡（滋賀県大津市）の塔の心礎に舍利容器とともに納められていた例などから、地鎮具として祭祀的に使われていたと考えられている。今回の無文銀銭は、飛鳥時代の遺構から土師器とともに1点が出土した。表面には「高志」という文字と「T」形の記号がタガネで刻み込んであり、大きさは直径3.0～3.1cm、厚さ0.1～0.2cm、重さ9.5gである。京都では初めての出土例であり、全国では14例目になる。また、実在して残っているものとしては24枚目になる。

瓦塔：供養塔の意味を込めて作られた須恵器の仏具である。瓦塔の高さは他の類例を見ると1m以上の大きなものまである。古いものでは、飛鳥時代の衣川廃寺跡（滋賀県大津市）の出土例があるが、多くは奈良時代から平安時代に作られ、関東地方に集中している。今回出土した瓦塔は、平安時代の整地層の中に含まれていた。屋根の軒隅のところしか出土していないので、何重の塔になるのか不明であるが、六角形の多角塔である。この瓦塔も、京都では初めての出土であり、全国では157例目になる。

唐三彩：中国の唐（7世紀初めから10世紀初めまで、古代の中国では最も文明の発展をとげた国）の時代につくられた土器である。白と緑と黄の三色を鮮やかな文様として塗りわけているのが大きな特徴であり、杯・壺・盤・香炉などの器形のほか、様々な副葬品が作られている。今回出土の唐三彩は、輪花状の縁をもつ皿で、型押しした文様もあるが、小片であるので二彩しか認められない。この器形の唐三彩は、京都では2例目の出土であり、全国で

は3例を数えるだけである。

以上、今回の調査では、縄文時代の遺構・遺物の発見はなかったが、予想外の重要な遺物の発見があり、飛鳥時代の遺構についても数々の成果をあげることができた。